

韓国人の懐に入る



北見西 石川 巖

四月二十七日より三日間、ソウル市で開催されたスタンレー・E・マキャフリーR・I会長主催の日韓親善会議は、日本側実行委員長細谷実P G、韓国側は朴東奎P Gを中心に、日韓両国のロータリアンとその家族を含む千人を数える人達の熱気に溢れた雰囲気の中で、中央国立劇場を舞台に開幕されました。

スタン会長が、ご自身の任期中、最後の親善会議をソウルで開催すると決定するまでには、周囲から数多くの進言や忠告もあったと聞いております。それは何故か、残念ながらわが国が一方的に韓国並びにその国民に、恨んでも恨み切れない三十六年間の慟哭の歴史を強制した事実が歴然として、残っているということであり

言葉を奪い、創氏改名まで強要した日本統治の背景には、必ずや対韓優越感が意識的に強く作用していることは否めない事実であります。フォークランド紛争にも見られますように、一民族が他民族を一時的に支配するなどということは、あつてはならないことであり、支配者が如何なる理由をつけて、如何に被支配者に善政を施したとしても、被支配者は決して心よしとする訳がありません。

韓日親善会議の実行委員長朴東奎P Gは、日韓両国は「近くて隔りのない国に」と申されておりますし、韓日親善連絡会議委員長呉在環P Gは、身近かな二つの国、韓国と日本が尚も遠き国、知られざる国として残ることの不幸を、私達の次の世代に残してはならないと、そしてこの韓日親善会議はこの不幸を解き去る道がどこにあるかを考えるために私達はここに集っているのですと吐露されております。

私達日本のロータリアンは、心静かに韓国人達の本当の心の動きを、わが心のうずきとしての確にとらえるべきであります。

終戦後、日韓両国の国交が正常化されましたのは、一九六五年十二月十八日、日韓条約諸協定批准の交換に始まりますから、また十七年の歳月しか両国間には友好、親善の絆が存在して

いないのであります。

ロータリーを通してというよりも、日本のロータリアンが率先して韓国に対する先入観や偏見をまず排除すべきでありまして、主権在民の韓国本来の姿を認め、国際環境のなかで韓国の置かれている立場をよく理解することが第一歩と考

えるのであります。

私は「友」で日韓親善連絡会議が先頭に立ち、日本国内で韓国のRCと姉妹関係をもって活動しているクラブが沢山あるので、この横の連絡をとって頂くようお願いしたことがあります。

今回の日韓親善会議に出席して、私の一番不満であったことは、スタン会長の提唱による親善会議ではありませんが、今後もこのような素晴らしい両国にとっては欠くことのできない友好親善の場を継承して行くという決議がなかったことでもあります。幸いに、次期R I会長は、日本人で二人目の向笠広次氏であります。日本人ロータリアンの本当の心を、韓国人達に理解していただけるように、このような親善友好の場を継続してゆくことは勿論、頻繁に開催することを心からお願ひする次第であります。

なお、今回の親善会議で、これこそ日本人には真似のできないホームビジットが、組み込まれ、韓国の懐に入れる感じが得られたことでもあります。これは私にとりまして、また今回韓国を訪問したロータリアンにも大変強い印象として残ったと考えます。(第二五〇地区 北海道 病態)